



① 「火花」は上の字と下の字を入れかえると「火花」ということばになる。② 「貝」は、「見」とはつきり区別がつくように書く。③ 「青虫」は、チョウやガの幼虫だが、とくにモンシロチョウの幼虫をいうことが多い。④ 「手足」の上下を逆にすると「足手」となるが「足手まとい」ということばがある。自由な行動のじやまになることである。⑤ 「生」にはいろいろな読みかたがあるのでおぼえておこう。

2

1 「ひよろひよろ」は、ここでは、足元がしっかりしないようす。「のっしのっし」は大きなものが力強くゆっくりと歩くようす。「ころころ」は、ここでは、小さくて丸いようす。「うろろう」は、あてもなく歩き回るようす。にウ、にアが入る。

2 「じいちゃんは食べないの？ おいしいよ」といっているので、「ボク」は食べているが「じいちゃん」は食べていないものである。「ここより後ろから」さがすことにも注意しよう。

3 「おれは、むかしから食べてたものがいい」といっているのは「じいちゃん」である。「おばさん」がエサをくれるようになる前に「ボク」と「じいちゃん」が食べていたもの、ではないものをえらぶ。

4 「そっぽをむく」はよその方を見ること。「じいちゃんは食べないの？」ときかれて、「ふん、そんなもの」と思っているのである。

5 文章のはじめに「はしのそばに、大きなさくらの木がしげっている。その根もとのかげに、ボクとじいちゃんはすんでいて」と書かれている。

6 「ボクとじいちゃん」が何かはつきりとは書かれていないが、少なくとも「ボク」は「ネコのエサ」を食べているし、はじめの方に「首の後ろをくわえられて」という表現もあった。

3 「〇ん〇り」のかたこのことばは、「〇っ〇り」のかたこのことばと同じく、よく出題される。

① 「にんまり」は、声を出さずにわらっているようす。

② 「うんざり」は、あきていやになるようす。

③ 「ちんまり」は、小さくまとまっているようす。

④ 「たんまり」は、たくさんあるようす。

⑤ 「じんわり」は、ゆっくりとそうなっていくようす。

⑥ 「あんぐり」は、口を大きく開けるようす。

4

1 「でも」は、意外な方向に話が進むときに用いられる。「だから」は、「でも」の反対で、当然そうなる（そうする）と考えられる方向に話を進めるときに用いられる。

2 直前の文は「だから、地面に巨大な図を置いてメッセージを送ろう。」で、その前の文は「月にすんでいる人には、地球の言葉がわからないかもしれない。」である。どちらの文が、この「数学者」独自の（その人だけの）アイデアというのにふさわしいだろうかと考えるとよい。

3 「死の世界」と反対の意味のことばということばは、まず、「死」と反対の意味のことばがふくまれているはずである。そして、おそらく「世界」と同じようなはたらきをすることばもふくまれているはずである。さかのぼってさがしていくと「死」と反対の意味のことばとして、「生き物」「生えている」「いのち」などが見つかる。それぞれチェックしてみよう。

4 アについて。たしかに「運河のようなものが見える」と書かれていた。しかし、「運河のようなものが見える」と「運河がある」はちがう。イについて。「あやしい」ということばは、「生き物があるのか、あやしくなってきました」というかたちで用いられていた。「あやしい生き物がある」とはまったくちがう意味である。ウについて。三行めに「むかしの人はそう信じていた」と書かれており、その「信じていた」ことには、「月にはおひめさまがすんでいる」などもふくまれている。